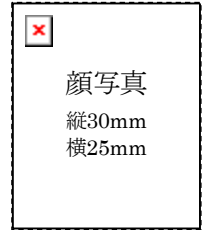


モノからみる生活と住居についての研究 － VK集落の事例を通じて －



K07026 大沼 健

Keywords

モノ 生活
住居 農村地域

1. はじめに

1.1. 研究背景・目的

建築は、建設されただけでは単なる物質であって、建築としての意味をなさない。人が使い、生活することによって建物に意味が生まれ、建築になる。つまり、建築を考える上で人々の生活を考慮しなければ、建築の本質を分析、または調査することは難しいと考える。

そこで、中部ラオスに位置する農村地域に流入している新しいモノに着目して建築を考える。モノをみることによって、固有の文化、伝統、生活様式を守りながら地域ごとに暮していた人々の現在の価値観を見つけることが出来ると考える。さらに、新しいモノと住居の使用方法との関係から、現在、農村地域でみられる住居の変化に迫る。近年まで、比較的自律した状態にあった農村において、都市部との多様な接合の影響が人々にどのような価値観を生み出し、住居空間にどのように表れているのかを研究する。

1.2. 調査の方法

2010年9月4日～10月3日(30日間)に、VK集落において現地調査を実施した。現地調査はおもに住居、集落の実測、居住者に対するインタビュー調査である。

2. 調査地概要

VK集落は中部ラオスのヴィエンチャン県ゲオウドン郡に位置する(図1)。



図1 調査地の位置

住居数は61戸、人口は292人であり、中国を起源とするタイ・プワンの集落である。ベトナム戦争時(1968年)に、シエンクアンから避難するために移住してきた人々により形成された。

3. 生活とモノ

3.1. 生業とモノ

VK集落の農業は水田による稲作が中心である。VK集落に焼畑を行える土地が少ないため、水田に頼る必要があるからである。稲のほかに、トウモロコシ、豆、バナナ、キャベツ、ミント、サトウキビ、パパイヤ、落花生、菜の花、唐辛子などを栽培している(図2)。

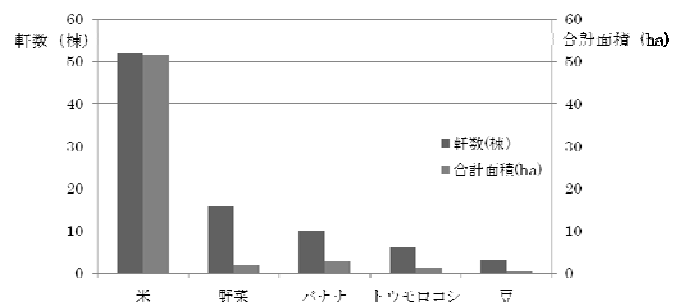


図2 主な生業の面積と軒数

灌漑設備が整っており、二期作を行っている。灌漑設備は、主に乾季に利用される。また、灌漑委員が村人により組織され、水の管理が行われている。1999年に耕運機が使われるようになってからは、水牛に頼っていた農作業を耕運機に変えて使用する世帯が増えている。しかし、川の近くの水田は道が整備されていないため、耕運機が進入できない。そのため、現在でも水牛によって農作業を行っている世帯もある。耕運機が使用できるようになったことで、作業効率が向上し、早く作業が出来るようになったという。しかし、収穫量に変化はない。

家畜は、おもに、水牛、豚、鶏、牛、アヒル、ヤギを飼育している。また、多くの世帯で、犬や猫を飼っている。豚は豚小屋で飼育され、水牛は世帯ごとに柵で囲わ

れた広い牧草地帯で飼育されているが、鶏やアヒルなどは、放し飼いである。稲作や野菜、家畜は、日常的に消費するために生産しているのはもとより、収入源を得るために売買の対象となっている。とくに水牛は、農作業の労働力として利用されるだけでなく、必要に応じてバイクや冷蔵庫の購入、住居を建設する際などの重要な財産になっている。その他にも収入減を得るために女性は家で機織りをする。また、農業以外の職業について収入を得ている世帯も多く存在する。それらは主に、軍事警察、警備員、運転手、大工、教員である。

このように、VK集落における生業は、多くが農業や家畜によるものである。しかし、現在では、様々な生業が存在する。

3.2 移動手段とモノ

移動手段に関係しているモノをみていくと、バイク、自転車、車、トラクター、ボートが挙げられる。自転車は主に集落内の移動に利用される(図3)。VK集落では、トラクターやボートは移動手段というより、生業を助ける道具として利用されている。そして、バイクや車は集落外に出かけるための長距離移動の際に利用されている。乗り合いのバスで町まで移動する手段に取って変わったのである。バイクは全世帯の61軒中52軒、つまり、90%以上の世帯が所持していることになる。

このように、移動手段に関わるモノの所持率から、VK集落の人々は集落内のみならず、まわりの村や町へ頻繁に出かけていることがうかがえる。その理由として、次のことが挙げられる。

- ・軍事警察、警備員、運転手、大工、教員など、農業以外の職について収入を得ている世帯も多く存在する。近くの町や村に仕事に出かけていく必要がある。

- ・集落内には小学校しか存在しないため、中学生や高校生は隣の村まで通っている。

- ・収入源として売買の対象となっている稲や野菜、家畜、機織りの布をまわりの村や町に売りに行く。しかし、車やトラックを所持するのは6世帯のみである。大量に売りに行くというよりは、自ら消費する稲や野菜などが余った場合に少しずつ売りに行っているのである。

このように都市との接点が生まれてくる背景には、集落に電気が開通し電化製品を購入する欲求がうまれたこと、携帯電話の普及に伴い様々な面で人々の活動範囲が

広がり、資金が必要になったことが一つの要因だと考えられる。

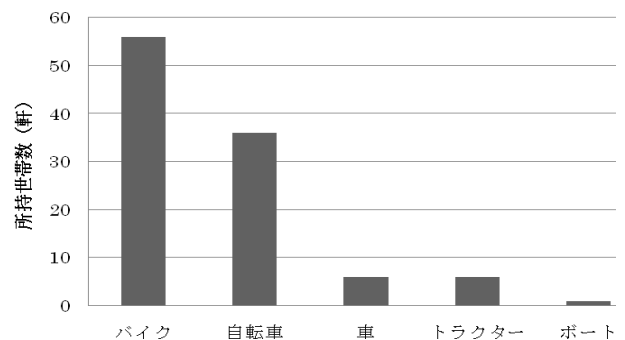


図3 交通手段に関するモノの所持数

3.3 電気の開通とモノ

1993年から、VK集落には電気が開通した。それに伴い数多くの電化製品が普及するようになった。VK集落でみられた電化製品は、テレビ、携帯電話、冷蔵庫、扇風機、炊飯器、VCD・DVDプレイヤー、スピーカー、電子楽器、ポット、ソースパン、冷水器、ゲームプレイヤー、ラジカセ、電気鍋、溶接機、洗濯機、電子レンジ、アイロン、コンピューターなどである。

①携帯電話

携帯電話の所持世帯数は、55世帯である。これは、全世帯数の90%に及ぶ(図4)。携帯電話の使用理由は、「VK集落の外で働いている息子や娘に連絡を取るため」「町で働いている家族と話がしたいから」など、仕事のためではなく、集落外にいる家族と話をするために利用していることが多い。また、固定式の電話を持つ世帯も存在した。しかし、通信方式は携帯電話と同一であるため、VK集落ではこれも携帯電話と呼んでいる。

②テレビ

テレビの所持世帯数は、56世帯である。所持率は90%である。そのため、多くの住居の屋敷地には、直径1.5mほどのテレビ受信用のアンテナがある。ラオスは放送局は存在しないため、隣国のタイの放送を受信している。VK集落の人々は、ニュースではなく、バラエティ番組をみていることが多い。

③冷蔵庫

冷蔵庫の所持世帯数は、47世帯である。所持率は77%である。冷蔵庫を購入するまでは、作った料理をその日のうちに消費しなければならず、翌日まで残しておくことが出来なかった。しかし、冷蔵庫が生活に加わる

ことで保存が可能となった。そして、一度に大量に調理し翌日に食べることができるようになった。また、肉などの生鮮食品を入れたり、冷水器がない世帯では飲料水を冷やして飲むためにも利用される。

以前は、残り物は、家畜の餌にしたり、炊事場に木製の棚を設け、そこに保存していた。しかし、現在は、家畜の餌にもならず、棚の必要性も薄れていると考えられる。このように、モノの導入によって食生活に変化が生まれている。

④扇風機

扇風機の所持世帯数は28世帯である。所持率は45%である。また、一軒で数台所持している。日中に休む時や、寝るときに利用されることが多い。高床式住居に住む人々は、乾季に風通しの良い床下で休むことが多いが、雨季になると、床下は雨水で湿っているため快適ではない。床上で涼しむためにも頻繁に使われるのである。

⑤電気炊飯器

電気炊飯器の所持世帯数は13世帯である。所持率は21%である。2008～2009年ごろにベトナム人がVK集落へ電気炊飯器を販売しに訪れた。値段は22万kip(日本円で約2200円)である。VK-28は必要な時もあるかも知れないという理由で購入した。主に急な来客があった時だけうるち米を炊くために、月に6～7回利用する。頻繁に利用する世帯は少ないようである。VK集落の人々は、うるち米よりもち米の方が好きだからという理由が多かった。

⑥VCDプレイヤーとスピーカー

VCDプレイヤーの所持世帯数は13世帯である。所持率は21%である。スピーカーの所持世帯数は24世帯である。所持率は39%である。VCDプレイヤーで再生した曲をスピーカーで流している。スピーカーは大きいものが多く、音楽を流すときは、外まで聞こえる音量で流している場合が多い。祭りのときには、スピーカーを住居の外に出して音楽を流している世帯もあった。

⑦ポット

ポットの所持世帯数は8世帯である。所持率は13%である。VK-30では、朝にコーヒーを飲むためのお湯を沸かすために使用されている。VK集落では、お湯を必要とする場面が少ないためポットの所有率も少ないと考えられる。VK-30も、朝の必要な時だけお湯を一度沸かす

だけである。

⑧冷水器

冷水器の所持世帯数は4世帯である。所持率は7%である。VK集落では、水道が整備されていないため、電動ポンプによる汲み上げ式の井戸水を生活水に利用している。飲料水は購入している。VK-1、VK-2、VK-13、VK-25では、購入した飲料水のボトルを冷水器にセットし冷やして飲んでいる。VK集落の77%の世帯が、冷蔵庫を所有しているため、冷水器を所有する意味はあまり無いと考えられる。冷水器を保有する4世帯のうちVK-2だけが冷蔵庫を所有していない。

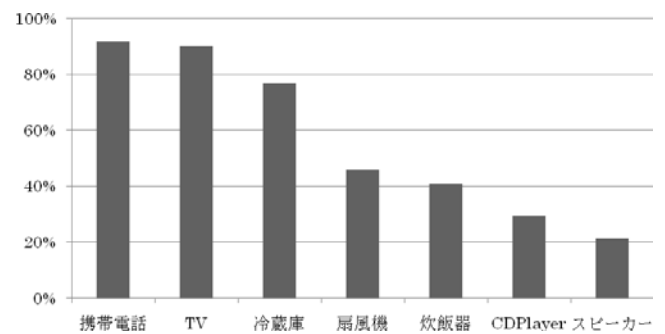


図4 主な電化製品の所持率

3.4 住居を構成するモノ

ここでは、「住居を構成するモノ」としての建材について述べる。ラオスの伝統的な住居は主に竹と木で構成されている。柱や床には木を利用し、壁には木板や竹に切れ目を入れて平たく割いたものを、編んで利用している。屋根は茅葺である。

それに対してVK集落では、竹や木以外にもトタン、スレート、鉄筋コンクリート、レンガといった新しい素材を利用している住居がほとんどである。建材の選択枠が増えたことにより、住居形式が多様化することにもなっている。次の第4章では、この点についてさらに詳しくみていく。

4. 住居形式

VK集落では大きく分けて三つの住居様式がみられた。高床式住居36戸、鉄筋コンクリート住居16戸、高床式+1F鉄筋コンクリート住居9戸の計61戸である。1992年頃にRCを用いた住居が現れてから、伝統的な高床式住居は減りつつある。伝統的な高床式住居でも、屋根はトタンやスレートを使用し、1階柱や基礎にRCが使われている住居が多く存在する。

現在このような住居形式の変化がみられる理由として、次のことが挙げられる。①高床式住居に使われている木材は、量が少なく、伐採が禁止されているためコストが高いこと、②屋根に利用されている竹も、量が採れなく、数年に一度、葺き替えを行う必要があるため、メンテナンスも含め費用がかかること、③高床式住居は風に弱く、二階が揺れやすいこと、④白アリにやられやすいことである。以上のような理由と、比較的費用の安い新しい建材が流入してきていることが、住居様式の変化をうながした大きな要因と考えられる。

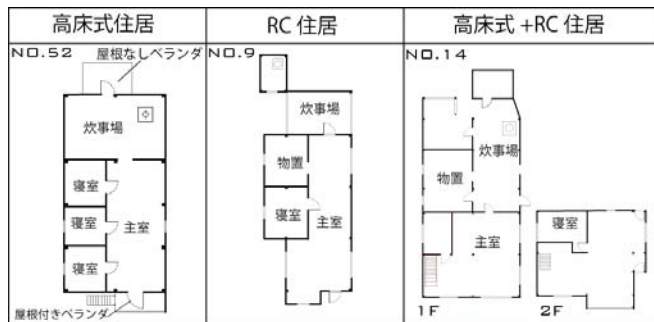


図5 住居形式と空間構成

5. 住居とモノ

5.1 住居形式とモノの所持率

各モノの所持世帯数を住居形式ごとに分類した。図5は住居形式の違いによる物品の所持世帯数を示す(図5)。図5をみると、高床式+RC住居のモノの所持率が高い傾向がみられた。ポット、冷水器は特に所持率が高い傾向にある。これは、高床式+RC住居の部屋数が関係していると考えられる。高床式+RC住居の部屋数は、高床式住居やRC住居に比べて多い傾向が見られる。以上のことより、モノの数と部屋の数には比例的な関係にあると考えられる。

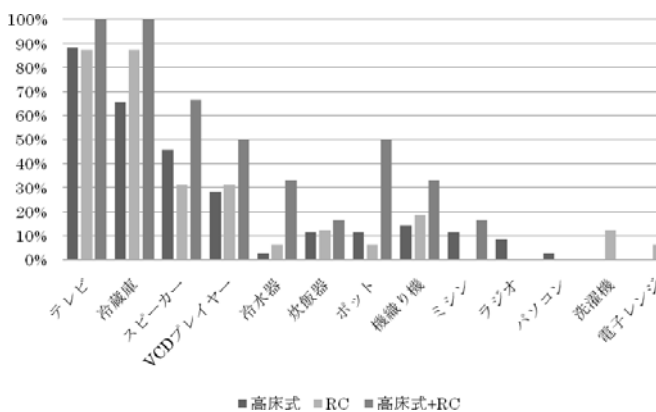


図6 住居形式とモノの所持率

5.2 住居空間とモノの配置

各空間に配置しているモノの数をみていく。すると、住居形式に関係なく主室に置かれている新しいモノの数が多いことがわかる。主室は住居の中で生活の中心となっている空間である。しかし、一般的に冷蔵庫や炊飯器、ポットなどの台所用品は炊事場に置かれた方が便利である。これは、VK集落の人々は、新しいモノを常に自分の居場所のそばに配置したいという意識の表れではないかと考えられる。しかし、その一方でRC造と高床式+RC住居では、炊事場と主室に挟まれた新たな空間に新しく入ってきたモノを配置している住居を見ることができた。

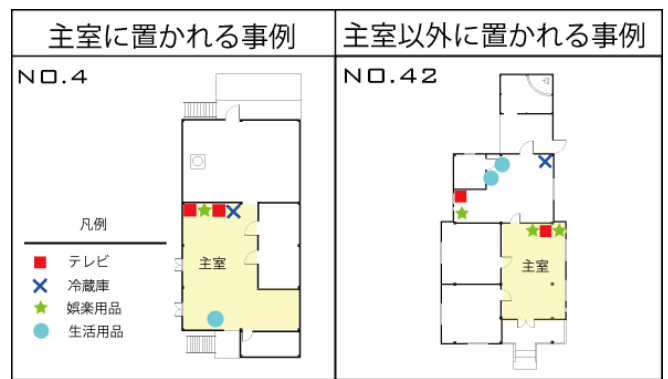


図7 モノの配置

6. おわりに

VK集落は一つの集落として完結しているのではなく、まわりの村や町と密接にかかわりながら組織されているといえる。まわりの村や町との関わり合いを持つことで、新しいモノが入ってくる。それにより生活様式が変化することがわかった。そのような変化は、住居空間にも表れており、新しい住居形式の誕生や空間の増加につながっているといえる。

参考文献

- 『ラオス概説』ラオス文化研究所(株)めこん2003年
- 『ラオスの開発と国際協力』ラオス文化研究所(株)めこん2003年
- 『ヴィエンチャン平野の暮らし』(株)めこん2008年
- 『東南アジアを知る事典』(株)平凡社 2001年
- 『北ラオスの赤 その暮らしとすまい』ラオス人民民主共和国情報文化研究省文化研究所・芝浦工業大学工学部建築工学科畑研究室2005年